

キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達 ミッション系学校におけるサービスラーニングの観点から

岡村直樹

(東京基督教大学大学院教授)

1. 研究の出発点と意義

2011年3月11日に宮城県牡鹿半島の東南東沖約130kmの海底を震源として発生した巨大地震は、日本における地震観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、岩手県、宮城県、福島県の沿岸部を中心に未曾有の大災害をもたらした。警察庁によれば、2012年8月22日現在、死者は15,868人、重軽傷者は6,109人、警察に届出があった行方不明者は2,848人で、また被害額の総計は20兆円を優に超えるであろうとも言われている。そのようななか、社会福祉法人全国社会福祉協議会は東北三県各地のボランティアセンターに登録したボランティア活動従事者の延べ人数は、震災より約5ヶ月間後の2011年8月21日の時点で686,800人に達したと発表した。震災からの復興が、ボランティア活動によって広く支えられていることがわかる数字である。一方で、同年6月30日付けの産経新聞では、東日本大震災のボランティア活動における学生ボランティアの占める割合が約2割で、阪神淡路大震災時の6-7割と比べて非常に低いことが伝えられている。時期的な要因や地域的な違いがその理由として考えられるが、特に大学生のボランティア活動はもっと奨励されてしかるべきではないかという意見が各所から聞こえてきているのも事実である。

本研究は以上の背景をふまえ、質的研究の方法、特にグラウンデッドセオリーを用い、東日本大震災の被災地にボランティアとして入ったキリスト教主義大学の学生の体験の記録とその分析を通し、以下の3つの目標を目指して実施された。

- (1) 歴史的大地震の被災地にボランティアとして足を踏み入れたキリスト教主義大学の学生の生の声を記録し、資料として残す。
- (2) ボランティア活動に従事したキリスト教主義大学の学生に起こった内面的変化を、「宗教心の発達」という観点から分析する。

(3) キリスト教主義大学が、学生のボランティア活動にさらに積極的に取り組むための一つの足がかりとして、キリスト教教育という観点から、震災ボランティア活動の意義を検証する。

2. 質的研究の特徴

質的研究は大まかに言えば、研究対象を数においてではなく、その質において理解し研究することを指す。質的研究の対局に位置する量的研究は、その名前からも判るように統計学的数量にサポートされたものでなくてはならず、ある意味非常に機械的にデータが解析、分析されていく過程でそれが決まるのである (Patton 2002)。さらに量的研究は、研究の客観性に重点を置き、実験的研究の構造や、仮説の証明過程を重視する方法論を多用する。一方、質的研究に関しては、以下のようなユニークな特徴を挙げることができる (大谷 2008: 340-354)。

- ・ 質的研究は仮説を立てること、またその検証をすることを目的としない。
- ・ 質的研究は実験的研究状況を設定しない。
- ・ 質的研究はインタビューやその他の観察を重視し細かい記録を作成する。
- ・ 質的研究は研究過程での研究者の主観を考慮しその内容を取り入れる
- ・ 質的研究は記録以外に得られた資料も排除せず総合して検討する。
- ・ 質的研究は研究対象の一般性や普遍性より、具体性、個別性、多様性に即する分析を行う。
- ・ 質的研究は研究対象や、そこに派生する様々な問題を社会・文化的な文脈のなかで取り扱う。
- ・ 質的研究は質的データに基づいて分析、理論化を行い、現象に内在する意味を見出す。

上記のように、質的研究は具体的な事例を重視し、個々の現象を時間、地域性といった特殊性のなかで捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として、それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある (フリック 2002: 22)。さらにこの研究方法は、量的研究が取り扱いを躊躇する、人間の立ち居振る舞い、感情の動き、直感といった部分にも大胆に切り込むことを可能とするのである。

質的研究は近年、様々な学術研究分野、特に心理学、看護学、教育学、社会学、文化人類学等において一つの主流な研究方法として確立されつつあり21世紀における重要な知的リソースとなるであろうと考えられている方法論である。質的研究は、オーストリア人の哲学者、エドムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール（Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859-1938）によって提唱された哲学の一分野である現象学をその理論的本源としている¹。フッサールはそれまでの「意識を自明視する実証主義的な認識論」を、實在の予想に基づく態度であるとして嫌い、ありのままの「事象そのもの」を明らかにすることこそが大切であるとした²。そのことのために彼は「現象学的還元」という独自のアプローチを生み出した。これは日常生活における人間の意識が素朴に信じて疑わない世界の諸事物（事象に対する好き、嫌い、肯定、否定等の判断を含む）を「かっこ」に入れ、これに対して無関心で中立的な立場をとった後、まだそこに残るものを「純粹意識」とし、それを厳密な哲学の題材とする方法である。フッサールは現象学を当初、「無前提」で「純粹」な哲学の学びになりうると考えていたが、その後人間の意識を極端に抽象化することに限界を感じ、現象学の矛先を厳密な哲学から、具体的な「生活世界」へと方向転換させていった。現象学はその後、フッサールの後継者であったマルティン・ハイデガーによって実存主義哲学へとその道筋を大きく変えることになるが、現象学的還元という方法そのものは、その後哲学以外の様々な学問分野において応用されるようになっていった³。本研究で用いられる質的研究の方法とは、現象学的還元、すなわち「できる限り先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察する」という現象学のアプローチの部分を取り入れ、推論や試論からではなく、個々の現

1 ヘーゲルも「精神現象学」という著作を残しているがこれは彼が提唱した「意識」を問題とする哲学の分野で、意識そのものから理性に至る発展の過程について言及したものである。この著作は精神の弁証法的発展をその題材としており、フッサールの現象学とは大きく異なる。

2 認識は認識される客観と、認識する主観の対立の上に成り立つ。では認識はどのようにその対立を乗り越えて明証な直感と、確実な真理に達することができるだろうか。そのために彼は、例えば世界がすでに「ある」とするような態度を棚上げ「エポケー」（判断停止）とし、そのような信念、そして「ある」とされる世界がどのように成立し、経験からどのように構成されるのかを探求することが必要不可欠であるとしたのである。デカルトからヘーゲルに至るまでの近代哲学は、「世界は客観的に存在する」という大前提の上に成り立っていたが、この大前提こそ問題があるとフッサールは感じたのである。

3 ハイデガーは自然界の中で人間だけが観念の世界をもつことから、人間を「現存在」と位置付け、さらに人間の死と死への自覚が生きていることの意味であると考えた。ハイデガーが現象学を携えて進んだのは、フッサールの「生活世界」とは違う「観念的」哲学の道であった。

象に視点を移し、そこを出発点として行う研究の方法論なのである。

質的研究は、ともすると単なる「インタビューの記録と、そこから主観的に導き出される研究者なりの解答」と考えられてしまうことが多いが、実際は非常に細かいデータ分析を必要とする研究方法である。フッサールの提唱した現象学をその理論的本源とする質的研究のアプローチを、学術的研究の方法として確立した功績をもつのは、バーニー・グレイザー (Barney Glaser) とアンセルム・ストラウス (Anselm Strauss) の2名であり、彼らの質的研究方法論は、グラウンデッドセオリーとして知られている。それはデータ収集、データ分析、理論構築という3つの主な段階から構築されている (Strauss and Corbin 1998: 12)。本研究のようにインタビューを中心に据えたデータ収集をする場合、研究者は自らの予見に頼らず、研究対象者ができる限り自由に語るることができるよう心がけつつ質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが必要とされる。インタビューの内容そのものの以外にも、社会学や心理学の研究分野でその重要性が証明されている人間の非言語によるコミュニケーション、すなわち研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線、服装等も重要なデータとして記録する。また研究対象者の数も、量的研究の場合のように多くを必要とはしない。広く浅く学ぶのではなく、狭く深く学ぶことから、研究対象者や対象とする様々な現象をどれだけ深く掘り下げることができるかという点が重要なのである。データの収集後、研究者が理論の構築に進むには、まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー (まとめり、または概念) を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一端バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業が必要となる (木下 2007: 209-216)。Strauss and Corbin (1998: 123, 192) によれば、例えばある社会現象を、質的データを通して分析しようとする場合、カテゴリー生成の枠組みには、2つの側面が存在するという。その社会現象が起こる条件、要因、状況、現象からどのような結果が生まれているかという構造的側面と、その社会現象がどのような展開や、やり取りを経ているのかというプロセス的側面である⁴。またデータ分析のために必要なもう一つの手法にコーディングがある。コーディングとは、データ中の諸概念を識別し、特性を発見したうえで構造的に関連づけ、新たな概念を構成し、理論化を可能にするためにコード (コードワード) を付ける作業である (Strauss and Corbin 1998: 153, 179)。

4 関口靖広「理論生成とグラウンデッド・セオリー・アプローチ」(<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/grounded.html>) 2010.1

明らかになりつつある研究結果の分析プロセスを多角的に行うため、グラウンデッドセオリーは、関連分野における既存の学術研究の結果をその参考として用いることがある。さらにその場合、質的研究の結果のみならず、量的研究の結果さえも参考とする。質的研究におけるデータ収集は現象学的還元概念に根ざしたものでなくてはならないが、データ分析の場面では、参考となりうる様々なデータを用いるのである。その上で質的に得られたデータを多角的に分析し、そこに見出すことのできる共通点や相違点等から理論構築を行うのである。この最終的な理論構築は、グラウンデッドセオリーの到達点とも言える。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように、構築された理論は推論や試論に基づくものではなく、現象が起こっている現場、つまり「グラウンド」(地面、地べた)から直接に得られたデータを基に築かれたものであり、最も現実に近いものとなるのである。

また特に、本研究のように、質的研究の方法が宗教の実践的研究に用いられる上にも大きなメリットがあると考えられる。質的研究は、量的に表すことの難しい宗教心、感情、心の動き、対人関係といった分野において有効だからである。質的研究が量的研究と大きく異なる点は、上記したようにデータを数量化する必要がない点である。例えば「寂しさ」の感情を量的研究が取り扱おうとするとき、「何回寂しいと思ったか」「以前よりその回数は増えたか減ったか」「研究対象者の何割が寂しいと感じたか」といった種類の質問が必然的に研究の中心となり、そこには厳密な構造が要求される。対照的に質的研究では、研究対象者の言葉を質問で遮ることなく、感じたままに語られた言葉や語調、さらに仕草までが研究データとして加味され分析されるのである。言い換えれば、質的研究は量的研究のようにいわゆる科学的合理性に優れている研究方法ではなく、主観的で直感的な側面を持ち合わせる研究方法である。質的研究はその性質上、研究者の主観がデータ収集から分析に至るまでの随所に用いられており、それを抜きにしては成立しないからである。また質的研究は非常に限られた地域で、限られた人数を対象にして行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化することができるという性質の研究ではない。さらに時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者をとりまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々である。質的研究の方法は、量的研究が取り組むことを躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもってそれらを詳細に記述することを通して、現象の本質を追い求めることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式のなかでその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果た

すためにあらゆるデータを活用するというスピリットのなかで、説得力をもつ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものであろう（萱間 2007: 3, 51）。

3. 研究方法と研究対象者

本研究は、Michael Quinn Patton の著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された（Patton 2002: 124-127）。本研究の初期段階で研究対象者となったのは、東日本大震災のボランティア活動に加わった大学生 23 名で、研究者が教鞭を執るキリスト教主義大学において募られた。まず彼らにボランティア活動について、簡単に記述してもらい、そのなかから、均質サンプリング（Homogeneous Sampling）方法のガイドラインに沿って研究対象者が絞り込まれた（Patton 2002: 235）。サンプリング（Sampling）とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることのできない質的研究において、より意図的（purposeful）に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。均質サンプリングとは、一定のサブグループをより深く知ろうとする際によく用いられる方法で、いくつかの共通条件をつけて研究対象者を絞り込むことである。今回均質サンプリングの方法を用いて選択されたのは 9 人（男性 3 名、女性 6 名）で、そこには以下の 6 つの共通点が存在する。

- (1) キリスト教主義大学に在籍する 2 年生と 3 年生である。
- (2) 今回初めて災害ボランティア活動に参加した学生である。
- (3) 震災以降、50 日以内に、ボランティア活動に参加した学生である。
- (4) ボランティア活動の場所は、岩手県、宮城県、福島県（東北三県）のいずれかであった。
- (5) 実際に被災地を目の当たりにし、また被災者とのコンタクトがあった。
- (6) ボランティア活動終了時から 1 ヶ月以上が経過している。

研究参加者の共通条件を (1) としたのは、本研究の焦点の一つでもある「宗教心」について、何らかの考察をした経験のある者を研究対象者としていたいという意図から

である⁵。また大学1年生には、入学してまだ日も浅く、大学において宗教的考察の機会があまりなかったかもしれないという懸念があり、研究対象者から外している。

本研究の初期段階で研究対象者となった学生のなかには、今まで「阪神・淡路大震災」や、他の自然災害においてボランティア活動に参加した学生が見受けられた。研究参加者の共通条件を(2)としたのは、以前の自らのボランティア体験と今回の体験を対比させる形での考察を促すのではなく、学生にとって初めてのボランティア活動に限定したデータを収集する意図からである。

研究参加者の共通条件を(3)(4)(5)としたのは、震災の爪痕が色濃く残る時期に、特に被害が甚大であった地域で、実際に被災者とふれあった体験をもつ学生からのデータを収集する意図からである。研究参加者の多くは、大学主催によるボランティア活動に参加した者であるが、別団体が主催したボランティア活動に参加した者もいた。

研究参加者の共通条件を(6)としたのは、研究参加者の宗教心の変化に焦点を当てるといふ本研究の性格上、学生がボランティア活動から戻った後、しばらく時間が経過しており、その間の変化をデータとして収集する意図からである。9名のボランティア活動後の実際の経過期間は、最長で約2ヶ月、最短で1ヶ月であった。以下に本研究に参加した学生のボランティア活動に関する基本データを列挙する。

学生(A) 日程：3月下旬—4月初旬，場所：東松島市，南三陸町，内容：ドロの掻き出し，家具出し，炊き出し，支援物資の配布

学生(B) 日程：4月下旬から5月上旬，場所：仙台市，内容：ドロの掻き出し，石灰撤き

学生(C) 日程：3月下旬—4月上旬，場所：東松島市，内容：ドロの掻き出し

学生(D) 日程：4月中旬，場所：福島県いわき市，内容：炊き出し

学生(E) 日程：3月下旬，4月中旬，場所：東松島市，石巻市，内容：後片付け，ドロの掻き出し，救援物資の仕分け，炊き出し

学生(F) 日程：3月下旬—4月上旬，場所：東松島市，石巻市，内容：物資の運搬と配給，炊き出し，ドロの掻き出し

学生(G) 日程：3月下旬—4月上旬，4月下旬—5月上旬，場所：仙台市若林区，東松島市，南三陸町，内容：水の運搬，倉庫の整理，救援物資の仕分け，ドロの掻

5 研究対象者の通う大学では、1年次に「キリスト教世界観」というクラスが必修科目として設定されており、そのなかで宗教心や信仰といったトピックが取扱われている。

き出し

学生 (H) 日程：4月上旬, 場所：仙台市, 女川町, 内容：支援物資の運搬

学生 (I) 日程：4月中旬, 場所：東松島市, 内容：ドコの掻き出し

さらにこの研究では、情報データソースの多元化のために、Triangulation of Sources の概念を用い、個人インタビュー、小グループディスカッション、および研究参加者の言動観察を実施した (Patton 2002: 247)。インタビュー、及び小グループディスカッションでは、宗教心の変化に関するデータを収集する意図から、ボランティア活動の「出発前」「活動最中」「その後」という時間の経過と、それに伴う変化を軸に質問を作成し、時系列でのデータ収集を試みた。また Patton のガイドラインに従い、Open-ended Interview Question を用いてできる限り自由に発言することを促しつつ、下記の3つの質問が基本形として用意された (Patton 2002: 342)。

- (1) 「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい」
- (2) 「被災地での体験を通して、どのような感想をもちましたか。自由に述べて下さい」
- (3) 「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい」

インタビューとディスカッションにおいては、上記の質問への自由な返答に対して、「それはどういう意味ですか」「もうすこし詳しく話して下さい」といった答えの明確化を促す質問をフォローアップとして行った。行動観察では研究参加者同士の会話や研究者とのやりとりのなかで、本研究に関連性があると思われる非言語的なコミュニケーション、すなわち、語調、言葉の抑揚、表情等が記録された。また本研究では、誘導的質問を避け、自主的発言を促すという観点から、宗教的な事柄に対する発言を意図的に促す質問は用意されていない。研究参加者にはできるだけ自由に、そして何でも語る事が促されており、その内容はすべて彼らが自主的に選んだものである。

4. 結果

本研究のデータ収集が実施されたのは、2011年6月14日から23日の間で、場所は本研究の研究者が所属する大学の食堂、及び教室である。インタビューやディスカッションの内容は、研究参加者の了解を得て電子レコーダーに記録された。音声データは研究者が文字に起こし、その回答の内容、頻繁に繰り返された言葉、また感情を込めて語られた言葉、といったカテゴリーを用いて分け、さらにコーディング法を用いてさらなるデータの細分化と生成を試みた。以下に収集されたデータから導き出された結果を6つの項目に分けて列挙する。

(1) まず「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい」という質問の答えから、研究参加者の多くに共通する、ボランティア活動参加のきっかけや理由が浮かび上がってきた。それらを大別すると、第1は、「何かしたい」「何かしなければならない」という強い気持ちが起こったこと、第2は、被災者の身に起こっていることを実際に見てみたいと思う欲求が起こったことであった。具体的には以下のような言葉が語られた。

「テレビに映る被災者の様子を見て、行かずにはいられなかった」

「同じ日本人が苦しんでいるのを見て、放っておけなかった」

「震災の様子をテレビで見て、このことを人ごとにしたくないと感じた」

「クラスメートがボランティアに行くのを見て、私も行かなくてはいけないと思った」

「友人が積極的に募金活動に奔走するのを見て、自分は現地に行きたいと思った」

「かわいそうと思うだけではなく、実際に行動すべきだという友人の発言に触発された」

「私にできることが何かあるのではないかと思った」

「自分たちでやれることは何だろうと、真剣に考えた」

「被災地の人の苦しみを体感したいと思った」

「どのような困難や痛みがあるかを知れると思った」

「実際に被災者の様子を見て、同じ苦難を体験したいと思った」

「被災地の人の苦しみをリアルに体感したいと思った」

「実際の被災者の状況をこの目で見てみたいという思いもあった」
「被災地のためにできることを現地で実際に知りたいと思った」
「ニュースで見るあの悲惨な場所を自分の目で見てみたいと思った」

研究参加者の多くに「何かしたい」「何かしなければならない」という強い気持ちが起こった引き金として多く挙げられたのは、テレビに映る被災者の苦しみの様子や、震災に関する友人・知人の行動や言葉等であった。また被災地で実際に「見たい」「知りたい」「体験したい」ことの対象としては、被災者が直面する厳しい現状が最も多く挙げられた。研究参加者の多くをボランティア活動へと押し出したのは、被災地の物質的状況というより、被災地の人間的状況に結びつく事柄であると言えるかもしれない。またボランティア活動に参加することを決断した際の思いについて、以下のようなコメントも聞かれた。

「原発の問題もあったので、被爆し、健康に害が加わることも覚悟した」
「身の安全は保障されていないということに覚悟した」
「生活は不自由になるだろうと覚悟した」
「周りの反対を押し切って行ったが、賛同してもらえなくとも良いと思った」

研究参加者の多くは、かなりの覚悟をしてボランティア活動に参加したことがわかる。彼らの多くが抱いた「見たい」「知りたい」「体験したい」という欲求は、ただ単に彼らの自己中心的な好奇心の欲求を満たすためだけでなく、彼らのもつ「被災者のために何かできることをしたい」という強い気持ちを実行に移すためにも、まず「見たい」「知りたい」「体験したい」と思った、ということができるかもしれない。

(2) 被災地の人のために何かしたいというモチベーションに押し出されて、東北三県に向かった研究参加者を待っていたのは、想像を絶する光景であった。津波によって出来た瓦礫の山や、何百人もが一カ所に身を寄せる避難所の様子を彼らは以下のように言い表している。

「先に被災地に行った人から『言葉にならない』という感想を聞き、自分は違う感想をもつのではないかと思ったが、やはり実際言葉が出ないほど驚いた」

「本当にこれが現実なのかなあと思った」

「そこに広がっているのは、ファンタジーの世界の光景なんじゃないかなあと
思った」

「始めは車から惨状を見て、夢なのではないかと思ったけど、実際に車から降りて、特に魚の生臭いにおいを嗅ぎ、ああ、本当に現実なんだと感じた」

「南三陸町の惨状を見て、絶句した。言葉が出なかった。異様な雰囲気だった」

「この静かな海が、本当にこんな惨状を生み出したことが信じられなかった」

「自分の見た光景が理解できなかった」

「こんな状況を自分の目に入れることになるとは思っていなかった」

「そこに自分がいることが不思議だった」

「ボランティアの作業をしながらも、自分がそこにいることを受け入れられなかった」

「体育館で避難生活をしている人々を見て、それが現実だとはなかなか信じられなかった」

「もし自分が直接この被害を受けていたら、きっと耐えられなかっただろうと思った」

研究参加者の多くは、被災地の様子に大きなショックを受け、被災地訪問から1ヶ月以上経った時点でも、言葉を用いてその時の状況や、自らの思いを説明することに困難を覚えているようであった。

(3) インタビューやディスカッションのなかで、想像を絶する被災地の光景と同等に感情を込めて語られたのは、目の前に広がる悲惨な光景のなかでボランティアとして動く自分自身の有り様や自分に対する思いに関する感想であった。

「行く前は、被災地についたら、さっとすべきことを始めようと思ったけど、実際に多くの被災者の姿を見て、足がすくんで立ち尽くしてしまった。前に進めず、考え込んでしまった」

「あまりの被害の大きさに、私なんか、ちょっと手伝うことに意味があるのかなと思った」

「何か役に立てるんじゃないかなと思っていたけど、自分の働きは本当に役に立つのか疑問をもった」

「被災した人たちの悲しそうな目を見たが、あまりのショックの大きさにかわいそうとか、説明できるような感情は出てこなかった」

「自分には何ができるだろうと思ったが、何も見いだせなかった」

「ボランティアに行く前は、色々やりたいと思っていた自分の浅はかさ、愚かさにかが付いた」

「(ボランティア活動期間の) 5日だけで疲れてしまった自分と、2ヶ月も避難所生活をしている人を比べて、がっかりした。自分はよわいなあと感じたし、悲しかった」

「ドロ出しのボランティアをした家の住人に対し、本当に大変だなあ、辛いんだなあと感じつつも、ベースキャンプに戻ってシャワーを浴びたいと思う自分がとても小さく思えた」

「安全な時に安全な場所から災害の様子を見る自分に対し、自分は何様だろうと感じ、申し訳ないと思った」

「自分は何もできないということ、それだけを学んだ気がする」

「自分の欲望がすべて罪深いことのように思えた」

「何かできると行って行ったが、作業も進まず、自分に何もできないことを思い知らされた」

「ひとりのおばあさんが、家の瓦礫の中で何かを探しているのを見て、「何かお探しですか。お手伝いします」と軽く言ったら、『だんなの死体を探しています』と言われ、返す言葉がなかった。苦悩のレベルの違いを感じ、また自分は本当に傲慢だったと思う」

「自分が東京でもっていた不平や不満は、被災者の苦しみに比べたら何でもないと思った」

「被災した人と同じ気持ちを味わえると思って行ったけど、実際行ったら、まったくレベルが違い、到底それを感じることはできないと痛感した」

「自分には家があるし、ご飯も食べようと思えば食べれるし、家族も傷ついていないし、基本的な必要は満たされているから、ボランティアに来ることができたんだなあと痛感した」

「家も流され、何もいない人の苦しみを味わうことなんて不可能だと思った」

「被災者に対して『大丈夫ですよ』などという言葉を経々しく使えないと思った」

「高齢の被災者が、もう死んだ方がましと言っていたが、返す言葉がまったく見つからなかった。気軽に答えることはできないと思った」

研究参加者の多くは、被災地ボランティアという活動のなかで、自らの能力や技量を再認識し、そのことを通して自分の実状を直視することを、ある意味「迫られた」と感じたようである。またそれは、例えば、「自分は何もできないということ、それだけを学んだ気がする」という言葉に代表されるように、「自分も何かしたい」「被災者の苦しみを共有したい」といった思いを胸に、意気揚々と被災地へ乗り込んだ自らの「甘さ」や「安易さ」に対する反省という意味合いが強いように思われた。

(4)「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい」という3つめの質問に対して最も多かった答えは、上記の結果(3)と同様、自責の念を含むものであった。東北三県から戻って1ヶ月以上が経過した時点で、多くの研究参加者は、被災地での体験の鮮明さや、被災者に対する思いが薄れつつあると感じ、それに対してフラストレーションを感じているようであった。

「もう帰ってきてから2ヶ月経つんですけど、だんだん被災地の体験が薄れてきてしまっている自分が居る」

「今も避難所生活をしている人がいるのに、私は普通の生活に普通に帰っている自分がいやだ」

「被災地の人の苦しみ、それを感じた自分を忘れたくないという思いがある」

「被災者のための祈りが、最近ありきたりになってきている感じがする。祈る思いを忘れてしまう時もあり、反省する」

「帰って来てたった2ヶ月なのに、もう100だった被災地の思いが30くらいになっていて、結局自分は自己中心だなと思う」

「満足な物資がないなかで食べたおにぎりの味がすごくおいしかったのを思い出す。いつも食べるおにぎりとは、おいしさも、喜びも違った。でも帰ってきて、2ヶ月経って、普通に感謝なく食事をするし、自分のことしか考えていない自分がいて、自分の変わり様には驚いた。がっかりする」

「ボランティアをした時に書いていた日記を見直すと、その時の自分が震災についてとても強い思いをもっていたことがわかる。でも今は、震災の重要度も自分のなかで下がって来ているなと感じ、それがいやだ」

研究参加者の多くは、被災地でのボランティア活動のなかで受けた様々なショックが、時間の経過と同時に徐々に薄れつつあることに、大きな危機感を感じている

ようであった。同時にそのような変化を通して自らの弱さを認識し、それを強く反省しているように思われた。

(5)「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい」という3つめの質問に対して(4)と同様に多かった答えは、ボランティア活動を通して得た、物事に対する新たな観点(「以前は〇〇と思っていたが、今は〇〇と思う」という表現が多用された)に関するものであった。具体的な内容は様々だが、「以前はあまり目を留めなかったこと」「以前はあたりまえと思っていたこと」等に対して、上記の結果(3)(4)に対するのと同じように、自戒の念も込められた表現を用い、それらが「改められた」と語られることが多いように見受けられた。

「日常生活で起こる様々な出来事一つひとつに、小さな喜びを見いだし、この限りある地上での生活のなかで、それを楽しんでもいいんだと思うようになった」

「震災前は、水道が出たり、電気がついたり、道路が平らなのも当たり前とっていた。そういう当たり前が当たり前ではないと思うようになった。あたりまえのものが、じつは崩れやすいものだということに気が付いた。人間が作り上げてきたものが、たとえば新宿の高層ビルなんかも、じつはもろいものなんだとを感じるようになった」

「色々なことに目を向けなければいけないんだなあと思うようになった。震災も大変だが、世界の他の国々にも多くの苦しんでいる人が居るという現実にも目を向けなくてはならないと思った」

「家に帰ってから節電を心がける私に、原発事故の影響を直接受けていないここで節電しても、被災地の役には立たないよと家族から言われたことに対し、電気を消すことより、それを気にかける心が大切だよと訴える熱い私がいることに気が付いた」

「この震災で亡くなったと同じ数の人が、毎年自殺という形で亡くなっていることに気が付き、被災地で苦しんでいる人もたくさんいるが、自分の周りにも苦しんでいる人はたくさんいるんだなあ強く思わされた。被災地でもそうだが、自分の周りの苦しんでいる人に目を向けることの大切さに気が付いた」

「様々な社会問題に対して無関心なスクールメイトに、世の中にはそれらで本

当に困ったり苦しんでいる人がいるという現実を目を向けて欲しいと思うようになった」

また研究参加者の得た「新たな物事の新たな見方」は、実は被災地でのボランティア活動の最中に気が付き、今に至るまでそれをもち続けているとする言葉もあった。

「ボランティア活動のベースキャンプでの留守番を任せられ、現場に出て行かないことに不満を感じたが、留守番をしながらの皿洗いや仕分け作業も大切な活動の一部だということをおぼせられ、現場に出て行った人たちのためのそのような働きも大切だと思い、小さなことにも意味を見いだせるようになった」
「ド口の中にあつた球根から芽が出て、スイセンが咲いていたんですけど、そんな些細なことに感動する自分がありました。神が造つた自然がそこにあることに感動したんだと思います」

また自らのもつていた宗教観の変化に関する言葉もいくつか見られた。

「被災地に行く前は、神は愛であり、すべてのことが神の愛から出ていると確信していた。被災地から帰つてきて、神は愛であるという信念は変わらないが、そのことを簡単に口に出したり、そのことを安易に祈つたりするべきではないと思うようになった」

「被災地での祈りのなかで、神様の計画とか、神のみこころという言葉が、まったく使えなかつた。以前は、そういった言葉を頻繁に使つていたけれど、物事をあまり深く考えずに使つていたと思う」

多くの研究参加者が新しく得た観点（ものの見方）の具体的な内容は多様だが、それらは彼らの「価値観」や「世界観」の大きな変化につながる内容であるように思われる。

(6) 研究参加者の全員に、質問の(3)へのフォローアップとして、ボランティア活動後にどのような「振り返り」の機会があつたかを尋ねた。「友達や家族と少し話した」「自分のなかで反省した」といった答えは多くあつたが、「ボランティア体

験を振り返る」という目的をはっきりと設定し、きちんと時間を確保したうえでのグループディスカッションやインタビューの機会はなかったと答えた。また本研究のインタビューとグループディスカッションに対する感想を求めたところ、以下のような返答があった。

「インタビューの質問で、色々な感情や思いが引き出された」

「自分が自分の体験を口に出して話すことによって、自分の考えがはっきりした部分もあった」

「ボランティア体験について、感覚的な記憶はあるけれど、それを口に出して伝えるのは難しいと思った」

「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」

「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気がつかされたことが多くあった」

「ボランティア体験の内容は似ていても、そこから受け取ることや考えること、学ぶことは人それぞれなんだなあとと思った。ああ、そうなんだと思うこともあった」

「被災地のことを忘れないように努力している人の話を聞いて、私もそうしようと思った」

本研究を通して、はじめて自分に起こった変化に気がつき、自分の思いが明確化されたと言った参加者も多くあり、またインタビューやディスカッションが有意義であったと言った者も同様に多かった。

5. 分析

研究結果の分析には、研究データ収集と同様、質的研究における Triangulation の方法が用いられる。具体的には、宗教学や社会学、また心理学といった、複数の学術的観点からなされた研究結果等を参考にしつつ、上記の6つの結果の検証を行う。

(1) ボランティア活動を、社会心理学の観点から研究する David Gerald (1985: 236-238) と Louis A. Penner (Penner and Finkelstein 1998: 525-537) は、

様々な人間がボランティア活動に足を踏み入れる経緯を調査、分析し、それを「determinants for volunteer work: ボランティア活動(参加)を決定付ける要素」として以下の4種類の形態(model)に分類した。

- ① role-identity model : 社会奉仕活動が属するグループの強いアイデンティティーである場合
- ② values and attitudes model : 社会奉仕活動の必要性に対して強い信念をもつ場合
- ③ volunteer motivations model : 自らのスキルアップや自己充実のための社会奉仕活動である場合
- ④ volunteer personality model : 純粹に人を助けたいと強く感じる場合

Gerald と Penner は、ボランティア活動に従事する者が、必ず上記の4つのモデルのどれか一つにだけあてはまるということではなく、複数の要因のなかで、どれか一つが最も強い場合が多いことを強調する。本研究に参加した大学生が、震災ボランティア活動に挑むきっかけとなったのは、「被災者の苦しみを他人事としたいくない」「被災者の苦しみを知ることによって彼らを助けたい」といった強い思いからであったことはすでに結果(1)で述べたが、それを見る限り、彼らの多くは、Gerald と Penner の提唱する4つのモデルの2番目と4番目、特に4番目の「volunteer personality model : 人を助けたいと強く感じる場合」に最もよく当てはまるのではないかと思われる(Thoits and Hewitt 2001: 115-131)。残念ながら本研究によって収集されたデータからは、なぜ彼らが当初そのような思いをもっていたのかという理由までを伺い知ることはできないが、本研究で記録された様々な内面的な変化は、そのような思いに後押しされてボランティア活動に参加した学生に起こったという部分は特筆すべき相互関係であると思われる。

(2) 本研究の参加者は、被災地で彼らが目にした光景を、「口では言い表せない」「信じ難い」という言葉を使って伝えようとし、さらには「異様な光景」「絶句した」「不思議だった」「ファンタジーの世界」といったフレーズも飛び出したことは、研究結果(2)で記した。このような日常を越えた震災危機体験は、どのような宗教的インパクトをもたらすものであろうか。社会心理学者で、宗教回心論を専門とする Lewis R. Rambo と Charles E. Farhadian は、危機(crisis)によって個々に生

じる宗教的变化を以下のように説明している。「危機によってもたらされる無秩序と混乱は、個々がそれまで『当たり前』と思っていた世界観に疑問を投げかける役目を果たすものである」(Rambo and Farhadian 1999: 25)。Rambo は、危機を、外的な危機と内的な危機の2種類に分類する。内的な危機は、体や精神の病、個々の考え方の変化に起因し、外的な危機は、政治的变化や天変地異、さらには人間関係の変化等の人間的な要因もそこに含まれるとしている(Rambo and Farhadian 1999: 26)。また危機を通して個々の日常に鋭く投げかけられた疑問に対して、それぞれがどのような態度で臨むかによっても、宗教心の変化に大きな違いが現れると Rambo は主張する。ある者は、疑問に対して消極的な態度を示す。その場合、大きな宗教心の変化が起こることは少ない。ある者は積極的にその疑問に対する答えを模索しようとする。その場合、その過程で世界観が変化し、それが宗教的回心につながる人が多いのである。

宗教教育学者で、若者の宗教性を専門に研究する Steve Fortosis は、危機体験について以下のように述べている。「発達論の立場から考えて、危機体験は、若者が成長した宗教性をもつに至るプロセスのなかで、非常に重要な位置を占めるものである。多くの若者は、危機体験を意図的に避け、それによって(ポジティブな)宗教性の成長の機会を逃してしまうのである」(Fortosis 1995: 241)。Fortosis は Rambo 同様、若者の危機体験を、宗教性のポジティブな変化と結びつけ、それを宗教的成長の好機として位置付けている。

さらに日本人の若者を対象にした研究としては、筆者が2009年に米国の宗教教育学会の学会誌 *Religious Education* で発表した、米国のキリスト教系大学に在学する日本人大学生の宗教心の変化を調査した研究があり、そこでは留学中に起こった様々な内的危機体験が研究参加者の宗教に対する思いに大きな変化をもたらし、またそのことによって、宗教に対するネガティブな感情が、ポジティブなものに変わったという研究結果を報告している(Okamura 2009: 104-103, 289-302)。

本研究の参加者はどうであろうか。まず彼らは、東日本大震災という危機に対して、ある意味自分の身の安全や、自分の時間を犠牲にして、そこに積極的に足を踏み入れた若者達であると言える。また自分が置かれた危機的状況のなかで、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を、自分自身の問題として受け止め、結果(3)(4)にも記されているように、「思い知らされた」「傲慢だった」などという言葉を用い、新たにされた自らの思いを説明している。本研究に記録された事

柄のなかで、宗教に関する直接的な言及の占める割合は比較的小さかったが、震災ボランティア活動は、少なくとも上記された社会心理学や宗教教育学の立場から、彼らにとってポジティブな宗教的変化をもたらす可能性を内包する活動（チャレンジ）であったと言えるのではないだろうか。

(3) ここで上記された宗教性のポジティブな変化について、それを「成長」や「発達」といった側面から、さらに具体的に考えてみたい。米国における宗教心理学研究や宗教教育学研究に多大なる影響を与えた Emory University のジェームズ・ファウラー (James W. Fowler) は、エリクソン (Erick Erickson) の心理発達論や、コールバーグ (Lawrence Kohlberg) の道徳発達論のモチーフに基づき、独自の faith development theory (信仰発達論) を構築したことで有名である。彼はキリスト教神学者のパウル・ティリッヒや、リチャード・ニーバーの人間理解に習い、「信仰」を「超越者との関係性に関して、全ての人間のもつユニバーサルな要素」として扱い、さらに「信仰」の成長と「心理的」な発達を区別せず、一つの発達の枠組みの中に両者を入れて理解することを提唱した。Fowler のユニークさは、「心理的発達」の概念を宗教の領域に受け入れたのと同時に、「信仰の発達(成長)」の概念を個別の宗教の閉鎖的な枠組みから取り出したことにあると言えるだろう。Fowler の信仰発達論は現在も欧米の宗教教育研究における一つの重要なセオリーとされている。以下が彼の提唱する信仰発達論の段階 (stages) である (Fowler 1981)。

第一段階「Intuitive-Projective faith : 直感的信仰」: 子どもが親の「目に見える信仰の形」を直感的に模倣する。自らの信仰に対する論理的な考察はない。

第二段階「Mythic-Literal faith : 神秘的で文字通りの信仰」: 現実と非現実を識別し、親以外の「信仰の形」を受け入れることができる。しかし物事を抽象的に考えることはできない。

第三段階「Synthetic-Conventional faith : 模造された紋切り型の信仰」: 家族や友人といった自分の周囲にある大切なグループや権威に自らを合わせる形で信仰を形成する。理論的な考察は浅く、物事を短絡的に考える傾向がある。

第四段階「Individuative-Reflective faith : 個人的で熟考された信仰」: グループや権威による信仰の形を批判的に見ることが可能。自主的な信仰の形成を試みるが二者択一的な理論展開が多い。

第五段階「Conjunctive faith：関連性、関係性を重視する信仰」：信仰の自主性に限界を感じ、他者の異なる主張や、逆説的なメッセージに理解を示す。相対主義的にはならず、自らの信仰の形を大切にしつつも、異者との対話や共存の可能性を探る。

第六段階「Universalizing faith：普遍的信仰」：真実の多元性や逆説性に対する迷いと共に自我を捨て、神の意志に身を任せ、社会貢献に尽くす信仰の形。

Fowlerの信仰発達論によると、高校生から大学生（16, 17歳から21, 22歳）は、ちょうど第三段階と第四段階の狭間に位置する。第三段階の信仰は、重要な周辺他者に強く依存する形で成立し、第四段階の信仰は、そのような他者の影響から離れ、自主的な信仰の形成を目指すものである。例えば自らが属するコミュニティーのなかの重要人物（先生、親、先輩等）から強い影響を受け、その信仰の形を模倣していた若者が、様々な世界観や価値観の課題、また自らのアイデンティティーの課題に自主的に取り組むことができるようになるのが、第三段階から第四段階への変化なのである。またこの変化は、青年期に訪れることが一般的である一方で、大人になっても第三段階の信仰で止まり、前に進まないケースも多々見受けられることも指摘されている（Fortosis 1995: 231）。では信仰の第三段階から第四段階に進むには、いったい何が必要とされるのだろうか。個々の若者の静かなセルフ・リフレクションを通して起こるケースも想定できるが、多くの場合それは既存の世界観や価値観が揺り動かされる体験を通し、それまであたりまえと思っていた物事に対して疑問をもつような場面で起こるとされている（Fortosis 1995: 231）。それは分析（2）で触れたRamboやFarhadianの危機体験にまつわる宗教的变化に関する記述と相容れるものである。

ここで本研究の参加者の体験をもう一度見てみたい。ボランティアとして自分が置かれた状況のなかで、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を敏感に感じたようである。結果（5）にも記されているように、彼らの多くは、それまで大きな疑問をもつことなく受け入れていた事柄や、「当たり前」と思っていたものの見方が、実はそうではなかったという結論にたどり着いている。研究結果（3）（4）からは、参加者の多くに、自らの「足りなさ」や「弱さに」直面し、それを繰り返し反省する様子を見ることができるが、このような内省もまたFowlerの語る信仰の発達のかかしであると言えるだろう。

また Fowler が参考とした心理発達論を展開する Erickson は、Fowler の第三段階と第四段階の狭間にあたる時期に、「同一性対同一性拡散」という心理的危機が訪れると主張する。同一性とは「自分は何者か」「何を信じるのか」といった問いかけに対する答えを中心とするものであり、言い換えれば自分のアイデンティティーを探す旅に出る時期と言うことができ、またこの時期の重要他者は権威者から peer（同年代の若者）に移行する（エリクソン 1973: 111-118）。インタビューやディスカッションの最後に、「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」「被災地のことを忘れないように努力している人の話を聞いて、私もそうしようと思った」といったコメントが多く聞かれたことについては結果（6）で記したが、ボランティア活動を引き金に得た新しい世界観や価値観には、peer の影響を受けて形成された部分もあったことが見受けられる。

今回の研究結果のみから、研究参加者の（Fowler の定義する）「広義」の信仰が、Fowler の提唱する信仰発達の段階を上（第三段階から第四段階に）進んだという結論に至ることは難しいが、彼らの多くにとって、ボランティア体験は、少なくとも Fowler の提唱する信仰発達の段階を上る足がかりになりうるものであったと言えるのではないだろうか。研究参加への今後の追跡調査が実施されれば、さらに具体的な宗教心の変化や信仰の成長の様子を見ることも可能かもしれない。

(4) 研究参加者たちが、本研究で用いられたインタビューやグループディスカッションという方法そのものに対して、非常にポジティブな感想をもったことについても言及する必要があるだろう。研究者は今回の研究過程において一切、研究対象者に対して自らの意見を述べることも、助言をすることもなかったが、彼らの多くは今回の研究が、自らのボランティア体験を深く、また客観的に振り返る良い機会であったとコメントした。

本研究で用いられた質的研究は、人間の生きた経験（lived human experience）の本質を記述し、それを研究することを目的とするという点において、フッサールにより提唱された現象学にその起源があることはすでに言及した。ボストン大学神学部学部長で、宗教教育が専門のメリー・エリザベス・モアー（Mary Elizabeth More）は、その著書（More 1998: 99）のなかで、現象学に基礎を置く現象学的教育方法を、宗教教育における一つの最も重要な教育方法であるとし、強く提唱している。それは従来の「先生が語り生徒が聞く」というトップダウンの教育方法ではなく、学ぶ者がそれぞれの体験を持ち寄り、またそこで起こるインタ

ーアクション（相互作用）を通して、それぞれがおのおのの結論を形成するという教育方法である。

結果(6)では、「(インタビューの) 質問で、色々な感情や思いが引き出された」「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気が付かされたことが多くあった」「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」といった意見が多く聞かれた。それはまた同時に、振り返りの機会がそれまで彼らに与えられていなかったことを示すものであり、ボランティア活動を大学生の貴重な学びの一部とするうえで、そのような振り返りの機会を提供することが、欠かすことのできない重要な部分であることも再認識するべきであろう。

6. 提言

本研究は、震災ボランティア活動に参加した9名の大学生の生の声というデータに基づいて考察されているものであるが、研究者は、研究参加者のボランティア体験のごく一部を垣間見たにすぎない。特に個々の学生の内面的な変化や、宗教的な変化は、心の深い場所で起こる現象でもあり、そのようなものがすべて表面化され、記録されたわけでもない。さらには、質的研究は、研究者の主観的な判断が多用される研究方法であり、また本研究の研究者が、研究参加者の所属する大学の教員であったことも、例えばインタビューにおける返答に何らかの影響をもたらしたことも十分に考えられる。繰り返しになるが、質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式のなかでその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するというスピリットのなかで、説得力をもつ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものである。そのような質的研究の特徴と現実をふまえつつ、以下に本研究を通して明らかになった事柄からの、研究者による2つの提言を記し、本研究の結びとしたい。

(1) 日本社会に様々なボランティア活動の機会が存在するなかで、震災ボランティアは、それが必要とされる場所、時期、また内容において、非常にユニークな活動である。特に東日本大震災は、歴史的な被害をもたらした大災害であり、その現場での活動と他のボランティア活動を単純に比較することはできない。本研究で記録された学生の生々しい感情の動きや感想がそれを明らかにしていると言えるだろう。しかし一方で、様々なタイプのボランティア活動が、特に高等教育機関におい

でその重要度を増しつつあることは事実である。特に近年取りざたされている「サービスマーケティング」は、「大学が有する潤沢な知的資源は、大学や研究者、学生だけに占有されるべきではなく、広く地域社会の人々にも還元されるべきである」という大学開放の理念に基づくものである(志々田 2007: 48)。しかし、大学を通して行われるボランティア活動を、「社会に対する貢献する」という方向からのみ捉えるのではなく、ボランティア活動の現場で起こる様々な困難やチャレンジを通して、「社会に学生の成長の機会を提供してもらう」という方向からの視点も重要であると思われる。様々なボランティア活動に共通して、それらが「満足感、達成感の体験」「健康的なセルフアイデンティティの醸成」「精神的安定」といったポジティブな結果をもたらすことは、すでに心理学や社会学の観点から頻繁に指摘されている(Thoits and Hewitt 2001: 118)。またボストン大学の学生を対象として実施された実践宗教倫理の研究では、大学生の倫理的発達に関して、社会倫理の授業を受けただけの学生と、ボランティア活動等を用いた実地体験を授業と併用させた学びを体験した学生では、後者の学生の倫理発達がはるかに勝っていたことに加え、彼らの多くが社会の弱者に対する自主的な活動にも積極的に取り組むようになったことが報告されている(Gorman, Duffy, and Heffernan 1994: 422, 429)。加えて本研究で明らかになったように、ボランティア活動が、Rambo や Fowler の指摘するような宗教心(または広義の「信仰」)のポジティブな変化や発達を促す経験になりうることを覚えるとき、大学におけるボランティア活動を通じた教育の重要性は、今後特にキリスト教系教育機関によって再認識されるべきであろう。

(2) 本研究を通して明らかになった研究参加者の具体的な内面的変化に、もし題をつけるとすれば、それは「自己を反省する」「苦しむ者を思う」「自分の周りの弱者に目を向ける」といった言葉に集約することができるかもしれない。被災者を助けたいという思いから被災地に向かった彼らが直面したのは、想像を絶する苦難であった。そのなかで彼らの多くは、当初自らがもっていた正義感や同情心を、それが安易であったと猛省しつつ、それでも彼らにできることを模索した。そのなかで多くが行き着いたのは、被災者の苦しみを忘れない努力を続けることや、今自分が置かれている場所で苦しむ人に目を向けることであった。これらは多くのキリスト教主義大学の建学の精神や教育の理念で唱われている「謙虚な姿勢」「他者理解」「隣人愛」「社会奉仕」といった教育目標に沿うものであると言えないだろうか。ボランティア活動によってのみ、これらを体得することができるということではないに

しる、少なくとも、学生の世界観に大きな疑問を投げかける機会となる類いのボランティア活動は、キリスト教精神や世界観を教育する上で非常に有意義なツールであることに間違いはない。

加えて、Gerald と Penner が、社会奉仕活動がグループの強いアイデンティティである場合、そのグループに属する者は、ボランティア活動に積極的に参加するようになると主張したように、キリスト教主義大学が、ボランティア活動に継続して取り組みつつ、それを大学の大切なアイデンティティの一つになるような努力をするとき、大学は多くの学生に対して人間としての大切な成長の機会を提供することができるようになるばかりではなく、地域社会と大学の絆をさらに深めることも可能となるのである。

【参考資料】

- 大谷尚 (2008) 「質的研究とは何か」『教育システム情報学会誌』25 (3) . 教育システム情報学会
エリクソン, エリク 小此木啓吾訳 (1973) 『自我同一性』誠信書房
萱間真美 (2007) 『質的研究実践ノート』医学書院
木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
志々田まなみ (2007) 「社会貢献活動と学習活動の融合—サービスマーケティング論」『広島経済大学研究論集』30 (1・2). 広島経済大学経済学会
ウヴェ・フリック 小田博志ほか訳 (2002) 『質的研究入門—人間の科学のための方法論』春秋社

Fowler, James W. (1981) *Stages of Faith*. San Francisco: Harper & Row.

Fortosis, Steve. (1995) The Religious Education for College Students. In Atkins, Harley.(ed.) *Handbook of Young Adult Religious Education*. Birmingham: Religious Education Press.

Gerard, David. (1985) What Makes a Volunteer? *New Society* 74(8): pp. 236-238.

Gorman, Margaret, Joseph Duffy, and Margaret Heffernan. (1994) Service Experience and the Moral Development of College Students. *Religious Education* 89(3) Summer.

More, Mary E. *Teaching from the Heart: Theology and Educational Method*. Harrisburg: Trinity International.

Okamura, Naoki. (2009) Intercultural Encounters as Religious Education: a Phenomenological Study on a Group of Japanese Students at a Christian University in California and Their Religious Transformation. *Religious Education*, pp. 104-103.

289-302. (和訳題「異文化体験と宗教教育—カリフォルニア州のキリスト教系大学に在学する日本人留学生の宗教心の変化に関するグラウンデッド・セオリーを用いた質的研究」)

Patton, Michel Q. (2002) *Qualitative Research and Evaluation Methods*. Thousand Oaks: Sage Publications, Inc.

Penner, Louis A. and Marcia A. Finkelstein. (1998) Dispositional and Structural Determinants of Volunteerism. *Journal of Personality and Social Psychology* 74(2): pp. 525-537.

Rambo, Lewis R. and Charles E. Farhadian. (1999) Converting: Stages of Religious Change In Lambo, Christopher and Bryant M. Darrol. *Religious Conversion: Contemporary Practices and Controversies*. London: Cassell.

Strauss, Anselm. and Juliet Corbin. (1998) *Basics of Qualitative Research*. Thousand Oaks: Sage Publications, Inc.

Thoits, Peggy A. and Lyndi N. Hewitt. (2001) Volunteer Work and Well-Being. *Journal of Health and Social Behavior* 42 (June): pp. 115-131.

関口靖広『理論生成とグラウンデッド・セオリー・アプローチ』(<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/grounded.html>) 2010.1